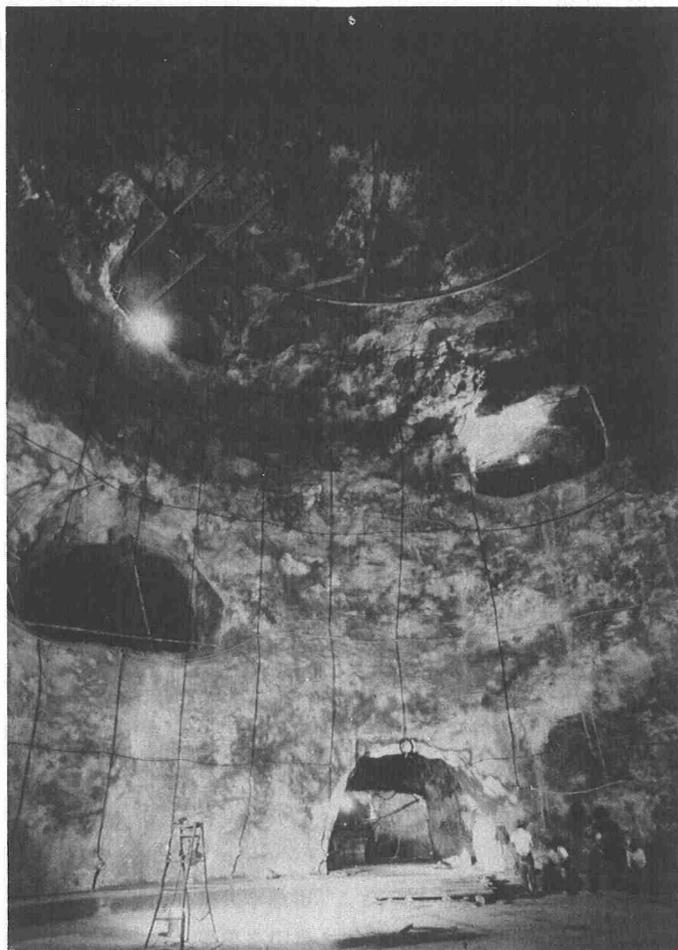


報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙の説明.....	小柴昌俊	1
退官に憶う.....	寺山 宏	2
寺山先生の御退官によせて.....	嶋田 拓	2
ご 挨拶.....	佐々木互	3
佐々木 巨教授.....	小林俊一	3
御挨拶の代りに.....	江橋節郎	4
江橋先生ノ 停年まで頑張ってノ.....	堀田凱樹	4
西島和彦教授 ソ連科学アカデミー 外国人会員に.....	猪木慶治	6
追悼 小倉安之先生.....	猪飼 篤	7
教務に関するアンケート調査について理学部教務委員会		8
〈学部消息〉.....		9

表紙の説明

表紙の写真は素粒子国際協力施設および物理教室小柴研究室が主体となって取りくんでいる陽子崩壊実験の為に岐阜県神岡鉱山の地下1000米に新らしく掘鑿した実験場です。直径約20米高さ23米の空洞ですが、2月15日現在ここは既に純水3000トンを貯える鉄製のタンクが完成しています。塗装を終わって3月末から1000個の巨大光電子倍管（直径50センチメートル）の取り付けが始まります。データ取得は4月末から開始する予定です。

素粒子物理学国際協力施設

小柴昌俊

退官に憶う

寺山 宏（動物）

昨年9月16日還暦を迎え、愈々本年度をもって退官致す事になりました。顧みて永い間理学部に籍を置かせて頂き、色々と貴重な経験をさせていただきました事を心から有難く思います。幸い今のところ健康に過しておりますので今後は肩の荷をおろした気持で自分に適した事を少しづつやってゆきたいと考えて居ります。

色々と懐しい思い出や感謝致したい事が山程ありますが、いざ書くとすると心をつくし得ないことをうらみませす。4年前中国に参りましたのを機会に、時折ぼそぼそと漢詩まがいのものを作ってみて独りで楽しんでおりますが、今年作から若干紹介させていただきます。やはり一抹の寂寥感がつきまといませす。

別 府

曉風弘浴烟 窓筍雨痕鮮

憂悴堪明鏡 雲間待杜鵑

阿蘇高原春

嘯鳥遷藤谷 群牛点蕨原

蘇峯悠白煙 千里曳愁魂

迎還暦

平蕪蒿艾慕青雲 城陌柳楊堪世塵

六十春光夢裏過 看看秋月度叢筠

退官有感

專覓鏡中晶 沈潛幾歲過

春朝新宿志 秋夕傷蹉跎

還暦促辞官 宦遊殘国訛

窃思吾業悠 別意忸怩多

最後に理学部の皆様の御清栄を祈ります。

(1982年2月18日記)

寺山先生の御退官によせて

嶋田 拓（動物）

寺山宏先生は、昭和43年に理学部生物化学教室から動物学教室に移られ、発生生理学講座を担当されました。当教室では、以前から手掛けておられた化学発ガン機構や細胞増殖制御機構の研究を更に進められ、アゾ色素による発ガン機構や細胞表層-膜系による細胞増殖制御機構などに多数の秀れた御研究を発表される一方、ウニ卵を用いて受精や形態形成の生化学的研究も行われ、多くの学生を育てられました。また動物学会その他の国内学会の年会や、国際発生生物学学会大会など、次

次に主催され、「先生、またですか」とこぼしながらお手伝いしたのも楽しい思い出です。また、理学部付属臨海実験所長御在任中に先生の御尽力で立派な宿舎ができ、私共も大いに利用させていただいています。御退官の日も近づき、先生もやっと雑用から解放され、毎日夜遅くまで若い人達と一緒に楽しそうに実験に励んでおられる今日この頃です。

長い間、本当にありがとうございました。御健康を心からお祈り申し上げます。

ご 挨拶

佐々木 亘 (物理)

理学部に来てからもう15年近くになります。着任した時は、例の騒動が恰度始まった頃でした。大学とは教育と研究の場であると観念的に捉えておりましたが、中に入ってみると驚くことばかりでした。研究室の建設に着手するまでに1年余の空白がありましたが、その間に、ふだんは考えられない位多くの方々に接する機会が得られましたし、又東京大学という巨大な組織の深層を垣間見ることができたと思っております。

紛争が鎮まってからは、幸に、超一流の先輩と同僚、又すぐれた学生に恵まれ、部外の方々をも捲きこんで、低温物理の分野で一仕事できたのは、まことに有難いことと感謝しております。

佐々木 亘 教授

小林 俊一 (物理)

佐々木亘先生の定年退官に際して、永年お教えを受けたものの一人として心からこれまでの御功績をたたえ、御指導に感謝し、同時にこれからのますますの御活躍と御健勝をお祈り申しあげる。

佐々木先生は昭和22年に本学工学部を卒業され、以後21年間にわたって電気試験所(現在の電子技術総合研究所)に勤められ、昭和43年に本学理学部物理教室に移られた。電気試験所時代を含め今日まで、半導体から金属、液体ヘリウムまで、またバルクから薄膜、微粒子にいたる多様な系の、主として低温における電子物性の研究を続けられ、幾多の顕著な業績をあげてこられた。日本の半導体物理研究が現在の水準にまで到達し得たことに先生の力が大きく与かっているのは誰もが認める所である。また、大学院主任、教室主任、総長補

外国出張の折には、行く先々で大学や研究所のレベルをそれとはなしに気をつけて見て来ましたが、東京大学のすばらしい点は何と言っても学部大学院の学生の質と量です。この人たちの個性をのばし大輪の花を咲かせることこそ東大のスタッフに課せられた使命だと思います。

さて、早いもので私自身の“卒業”も目前に迫りました。15年間に得ることの多かったのに較べ、学部にも教室にもさしたるお役に立つことができなかつた点、心苦しく思っております。学部の皆様のご健闘を祈って、ご挨拶に代えさせていただきます。

佐など、行政面でも本学の運営に多くの貢献をなされた。

先生の御性格には温厚さと峻厳さの、一見相反する二つが同居していて、優しいけれども怖いというのがお教えを受けたわれわれの共通した感想ではないかと思う。強い正義感を持たれ、何事にもすじを通すことを重んじられるので、周囲の人々に頼りにされ、御指導をうけた人々の尊敬を集めてこられた。一方で、学生と夜を徹して飲み、スキーを楽しまれる気さくさも先生の大きな魅力の一つである。

御退官後の先生は東邦大学において教鞭をとられる。先生が教育と研究にますます御活躍され、いつまでもわれわれを御指導下さることを信じて疑わない。

御挨拶の代りに

江橋節郎(物理)

確か昭和51年初頭に、この広報に雑文を書かせて戴いたことがある。物理教室の一隅に置いて戴くこととなったがまことに居心地がよいのだということを、くたくたく書き綴ったことを覚えている。その後この併任を辞退すべきだと思ったことも何度かあったが、その度にあれこれ理由をとりつくろって今日までお邪魔しつづけることになった。その原因は、何よりもこの居心地のよさにあった。停年制というものは確かに必要だと思う。これがなかったら、そのまま居直ってしまって、それだけ物理教室には御迷惑をおかけすることになったと思う。

教室とは直接関係はないが、小谷先生が主宰された国際生物物理学会議(1978)は、この平穩な

12年間における唯一の起伏であった。和田(昭)教授と御一緒にあれこれ苦労したのも、今となれば楽しい思い出である。

医学部で同じ釜の飯を食った堀田、若林両君が、それぞれ何とか恰好のついた研究室を作り上げたことは、私が何かしたわけではないにしても、大変嬉しいことである。私の併任について今井、久保両先生がわざわざ医学部まで御足労戴いたことに、幾分かはお応えできたような気がしている。

42年の東大生活の中で、この理学部での12年は、よいことづくめであった。これも一重に物理教室の方々の御理解と御寛容によるものである。

本当に有難うございました。

江橋先生！ 停年まで頑張って！

堀田凱樹(物理)

江橋先生の御停年にあたって何か書けと編集部
の依頼をうけ、考え直してみると先生の教えて受けてもう20年もたつのに気づき、愕然としてしまった。筋収縮のカルシウム機構、トロポニンの発見など世界をリードする数々の業績により、学士院恩賜賞・文化勲章をはじめとして世界から多くの栄誉をうけられたことは皆様よく御存知のことで、今更私ごとやかく申上げるまでもない。そこで永年の御指導に感謝しつつ、私的な思い出や感想を述べさせていただきますと思う。

私をはじめ先生にお目にかかったのは、医学

部での薬理学の講義であった。当時、先生は助手から教授になられたばかりで、優秀な少壮教授という噂に興味をひかれながら講義に出席したのが、まだ昨日のことのように思われる。その頃の私は医者になって人類に貢献しようか、それとも学者になろうかと迷っていた時期であった。知識のつめ込みややや食傷みで、バスケット部に入って最も苦手なスポーツを試してみたり、演劇部に入って役者のまねごとや大道具の製作に汗を流したり暗中模索していた時代なので、新しい教授の講義にはある期待感をもって出席したのである。ここ

で、江橋先生のすばらしい講義の話ができると、先生を送る言葉として体裁が整うのであるが、いかんせん、先生のお話はほとんど理解不可能なものであった。

今から考えると、細胞膜の無機イオン過程と興奮現象、およびその薬理学の話がされた(らしい)のであるが、私はそのような話に ready でなかったわけである。さらに、初講義というわけでよく準備をされ、勉強されたのに違いない。更に困るのは、先生の頭脳の中での論理の組立てがわれわれ凡人のそれとは少々異なるらしいのである。話題や論理が一見飛躍するのである。しかし、それは支離滅裂とは違う。その証拠に、われわれも慣れるとその論理についていけるようになるのである。

さらに臨床医学を学ぶようになると、私はやっと基礎的な学問に進もうという気持ちになり、友人達と江橋研のセミナーなどに参加させていただくようになった。先生から学問的な教えを受けるようになったのはその頃からである。当時は、小谷先生・大沢先生・和田先生など多くの先生方と御一緒に日本生物物理学会をはじめられた頃で、江橋先生は「これからは物理学が大切だ。皆で物理の勉強をしよう」と卒先して言われ、毎週土曜の午後に物理のセミナーが開かれていた。当時都立大学教授であった故山本三三三先生と助手の大木新平先生が参加して下さり、熱力学・統計力学・量子力学・量子化学・レオロジーなどを教えて下さった。まさか将来、物理学科に奉職しようとは夢にも思わなかった時代で、もっと真面目に勉強しておけばよかったと今になって悔まれる。

江橋先生はわれわれに対して極めて寛容である面と、非常に厳しい面とをお持ちであった。御自身は夜中すぎまで実験されるのが常であり、研究者が夜中まで研究室にいるのが当たり前というお考えであるらしいが、だからといって夜中に実験室を見廻って「今日の新しいデータは？」と聞くような酷なことはされない。こちらから積極的に質問や報告をしない限り、じっと見守って下さると

いうタイプであった。しかし、折にふれて「研究以外のことを考える暇などある筈がない」などとやんわり言われると、さてはさぼっているのがバレたかと思われがちという訳である。われわれをどなりつけられることはないが、代りに一緒に研究に従事しておられる文子夫人を強く叱られるので、その時は私達はそっと部屋を抜け出すのが常であった。もっとも、文子先生もわれわれには恐い存在で、特に江橋先生が外国出張の時などは、大掃除などいろいろな徴集令が下るので、「鬼のいない間に……」という訳にはいかないのである。

江橋先生が理学部物理学教室の併任となられ、さらに私と若林助教授が加わって、和田昭允教授と協力して生物物理学の教育と研究に努力している。現在は生物物理が幼少年期を終えて成熟した発展期を迎えつつある時であり、この大切な時期に江橋先生を送り出さねばならないのは大変残念なことである。今でも殺人的な量の雑用をこなし、しかも研究に励んでおられる姿を見ると、停年制とは何だろうという疑問も感じる。しかし、この制度は生物と同じように理由があって進化してきたものであり、致し方ないことではある。幸い、御退官後は岡崎の生理学研究所の新設講座の教授として研究をつづけられるとのことなので、案外、東大を離れてオロカナ弟子共の重荷から解放されてノビノビ研究に精を出せると喜んでおられるのかもしれない。

ただ一つ気がかりなのは、先生は忘れ物の名人だということである。先生の教えをうけた者で、先生の忘れ物を届けるために走り廻ったり、あちこち探し廻ったことのない人は稀ではないか。私が米国留学中に寄って下さった時も、前に寄られた所での忘れ物の回収と、出発された後に残された忘れ物の発送と、弟子にも苦労は多かったのである。岡崎に移られると、忘れ物の世話をする人は奥様だけになってしまうので心配である。さらにもっと心配なのは、われわれを忘れてしまわれるのではないかということである。

そこで、最後に、先生に日頃から若林先生と私
がお願いしている言葉をもう一度繰返して、この
文章を終わりたいと思う。

「江橋先生、停年まで頑張って下さい、も
ちろん、われわれの停年までですよ。」

ほたるの光まどの雪
ふみよむ月日かさねつつ
いつしかとしをすぎのとを
あけてぞけさはわかれゆく

とまるもゆくもかぎりとして
かたみにおもうちよろずの
心のはしをひとことに
幸きくとばかりうとうなり

西島和彦教授 ソ連科学アカデミー外国人会員に

猪木慶治(物理)

前理學部長である物理学教室の西島和彦教授は、
昭和57年9月24日のソ連科学アカデミー総会にお
いて「ソ連科学アカデミー外国人会員」に選出さ
れた。

西島教授は「西島-ゲルマンの法則」の発見で
素粒子論の進歩に画期的な貢献をされたのみでな
く、また場の理論の研究でも多くの先駆的業績を
あげられた。また日本の素粒子論の分野において
多くの研究者を育成し、科学行政、国際交流に果
たされた功績も大きい。西島教授がソ連科学アカ

デミー外国人会員に選出されたことにより、日本
とソ連の科学者の交流が更に活発になり、両国の
科学の発展が促進されることがのぞまれる。

本年、上記会員に選出された他の日本人は伏見
康治氏(阪大、名大名譽教授、物理学)、吉田耕
作氏(東大、京大名譽教授、数学)、八木国夫氏
(名大医学部教授、生化学)である。

追悼 小倉安之先生

猪飼 篤 (生化)

小倉安之先生は昭和35年に理学部に新設された生物化学科の教授として酵素学講座を担当され、新しい時代の酵素学を率先して実践すると同時に学生の教育に熱心にあたられました。酵素の反応機構論は生化学の古いそして中心的な課題であり続けていますが、先生の研究はいわゆるミカエリス・メンテン法とよばれる定常状態法的解析の時代から、新しい創意と工夫によって前定常状態の反応解析が世界的に開始された実り多い時期にあたっています。そして、はじめは、数人の人が手分けして“ヨーイドン”で、反応を開始させる人、反応を追跡する人、時間を測る人などが協力して酵素を基質の結合を数秒以内につかまえる工夫から出発されたそうです。そのうち、昭和28年-31年にアメリカのブリトン・チャンス博士のもとへ

研究に赴かれ、近代的な迅速反応測定器を用いてカタラーゼという酵素の反応機構を研究されました。その後、フラビン酵素の研究も開始され多くの門下生を育てられました。今もカタラーゼ、フラビン酵素などの分野では小倉先生の教えを受けた方々が活躍しておられます。カタラーゼについては生涯、情熱を持たれ、亡くなる直前まで北大の山崎教授と共同で前出B. チャンスの提出した反応スキームに対立する反応機構の考察を進めておられました。

先生は着想のよい研究を好まれたようで、これが反応機構という分野をこよなく愛しておられた原因のように思います。私達が学生時代に受けた講義の進め方も、こみ入った反応論を実に簡単そうにすっきり説明するスタイルを好まれました。



小倉安之先生古稀のお祝い会
昭和55年12月 (新宿豪華にて) 奥様と小倉研究室のメンバー。

私は卒業実験を小倉研究室でやらせてもらいましたが、研究室は明かるいふん囲気で、先生がいろいろな人の話を「そうかい、そうかい」と目をしばたたかせながら聞いておられた姿が印象的でした。

東大教授時代にも、研究に、日常にそのダンディズムを申し分なく発揮されていましたが、定年退官後教鞭をとられた東邦大学では更に多くの女子学生に囲まれ、人も羨むような垢抜けた紳士ぶりだったようです。

先生は明かるく強い性格の持主で多くの人に親しまれておられました。10年程前に一度脳出血で病床にあった時も、数年前から今回不治の病となったのどの癌に冒されておられた時も、周囲の人

々が皆驚きを禁じ得ないような強さと明かるさで病と闘っておられました。そんな時でもなにかと相談やお願いに訪れる我々に笑顔を絶やさず対応して下さいました。

昨年暮からかなり病状が悪化して、昭和大学藤ヶ丘病院に入院しておられました頃お訪ねした時も、苦しい息づかいの下からいろいろと話をしては実にやさしいお顔で笑っておられました。奥様のお話ではずい分御自宅へ帰りたがっておられ、正月をはさんで1ヶ月程願いかなって自宅療養された由です。最後に小倉先生の御冥福を祈って筆をおきます。

なお本稿執筆にあたり、川喜田正夫博士、鈴木春男博士のお話を参考にさせていただきました。

教務に関するアンケート調査について

理学部教務委員会

理学部教務委員会では、昭和56年末から57年始めにかけて、理学部の教官と学生を対象に、教務に関するアンケート調査を行なった。以下はその結果の概要である。

(1) 回答数

回答の総数は教官54、学生86、計140名であった。その内訳を表に示す。なお、教官に対しては個人宛にアンケート用紙を送付したが、学部学生

と修士課程の大学院生に対してはアンケート実施についてアナウンスを行ない、用紙は教室等を単位として一括配布した。博士課程の大学院生は今回の調査の直接の対象ではなかったが、アンケートに参加して差支えない旨を用紙に附記した結果、4名から回答が寄せられた。

表 アンケート集計

	学 部		大 学 院			教 官		
	3 年	4 年	修 士		博 士	助 手	助 教 授 講 師	教 授
			1 年	2 年				
回 答 数	30	10	26	16	4	23	10	21
在 籍 総 数	254	297	225	241	456	180	76	79
回 答 率 (%)	11.8	3.4	11.6	6.6	0.9	12.8	13.2	26.6

(2) 回答の内容

アンケートでは(A)理学部学生に対する現在の教育について改善すべき点があるか、(B)改善すべき点がある場合、その内容と改善方法、(C)その他の意見、の3点について回答を求めた。回答の内容は多岐にわたったが、(A)については、現在の教育について何らかの問題点があるとしたものが112で大多数を占めた。また、(B)では、教養学部からのいわゆる進学振り分け(「進振り」)制度に関連した意見が78あったことが注目される。とくに「進振り」制度のために教養学部での学習が点取り競争になり易く、創造性のある人を育てる上でマイナスになっているという意見が学生・教官を通じて目立ち、また学生からは、教官により採点基準が異なるため、総平均点に基く振り分けに際して不公平があるのではないかという声が多

かった。

「進振り」関係以外では、学生・教官を通じて第4学期の授業が過密であるという意見が多かった。また、授業の内容に関する学生からの注文もいくつかあった。

調査結果の取扱い

今回の調査は回答数も少なく、また、回答の内容も多様であったため、この結果から理学部の教官・学生全体の傾向を速断することはできないが、回答された意見の中には有益な、示唆に富むものが多かった。理学部教務委員会では、調査結果を要約して、理学部教授会に報告するとともに、この結果を今後の理学部の教務を考える上での貴重な参考資料とすることにした。

熱心に回答を寄せられた方々に感謝する。

《 学部消息 》

教 授 会 メ モ

1月19日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 教務委員会報告
(5) 昭和58年度政府予算案について
(6) 紀要委員会報告
(7) その他

◎ 同日の教授会に先だち13時より13時40分まで同場所(理・4号館3階会議室)において、「大学教官の年令構成と若手研究者の育成について」と題して、田丸教授(化学教室)からお話がありました。

2月16日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 理学部規則の一部改正について
(4) 学士入学について
(5) 研究生の研究期間の延長について
(6) 昭和58年度受託研究員の受入れについて
(7) 人事委員会報告
(8) 企画委員会報告
(9) 植物園長の選出について
(10) 臨海実験所長の選出について
(11) 分光化学センター長の選出について
(12) 人事委員及び会計委員の半数改選について
(13) その他

(次回予定：3月16日(水)13時30分より)

理学部長と理職との交渉

理学部長と理学部職員組合の月例交渉は、昨年12月20日と本年1月31日、理学部会議室でおこなわれた。

主な内容は以下のとおりである。

1. 人事院勧告の凍結撤回とその完全実施について

理職は、標記の要求が正当なものであり、かつ多くの教職員にとって切実な問題となっていると主張した。これに対して学部長は、組合としての主張や行動は、理解できるので、総長に組合の要求を伝える、と表明した。

2. 定員外職員の待遇改善問題

理職は昭和58年も57年にひきつづいて、定員外職員の待遇改善にできる限り努力するよう要望したのに対し、学部長はこれを了承した。また、理職は、3年前以降採用になった定員外職員の少なくない方々が、仕事の継続を希望していること、また職場でも仕事の継続を期待しているという事実を指摘した。そして、理職は、継続を希望する全員が、継続雇用されるよう学部長が努力することを強く主張した。学部長は「難しい問題だが努力はしてみる。」と述べ、ひきつづき両方で協議を続けることを合意した。

3. 助手からの要求について

① 東大電話帳、理学部便覧への助手の氏名の

掲載

本件に対し、理学部長より、教室主任会議及び教務委員会にはかった結果、実現の方向で動いているという説明があった。

② 休職期間の短縮

理職は、助手が海外出張する場合、即休職となるケースが多く経済的打撃をうけているという事実を示し、改善を強く要望した。そして具体的措置として、理学部全体の教官空ポストを活用して休職期間をできるだけ短縮すること、とりわけ勤勉手当支給月の休職扱いを避けるよう空ポストを活用すること、という提案を行なった。これに対し理職からの具体的提案については、検討を約束した。

③ 公用旅券における「助手」の英文訳

理職は、助手の英文訳 assistant は 実態にあわないこと、そのため不利になる場合もあること、相手方にも失礼な場合もあるので改善するよう主張した。学部長は、この実現のための措置について検討することを約束した。

上記の議題以外にも、昇給・昇格問題、各種危険手当問題、2号館自転車置場設置の件などで話し合いがおこなわれた。

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

人 事 異 動 報 告

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
化学	助 手	鈴木 薫	58. 1. 15	休 職	58. 1. 15~58. 12. 31
地理	講 師	大森 博雄	58. 2. 1	昇 任	地理学教室助手より
物理	技 官	春山 久一	58. 1. 1	採 用	

外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏 名	現 職	研究員期間	備 考
数学	服部教授	アメリカ	Ted Petrie	ラトガース大学 教授	58. 5. 1 ~ 58. 7. 31	日本学術振興会外 国人招へい研究者
物理	有馬教授	西ドイツ	Jörg Hüfner	ハイデルベルグ大学 教授	58. 2. 15 ~ 58. 3. 31	

海 外 渡 航 者

(1 月)

所属	官職	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
地質	助手	松本 良	アメリカ合衆国	1. 9~ 1.26	国際深海掘削計画第87次航海事後 打合せ及び堆積岩岩石学の研究の ため
化学	助手	鈴木 薫	連 合 王 国	1.15~12.31	物理化学に関する研究のため
天文	助手	吉村 宏和	フ ラ ン ス	1.15~ 2.21	太陽磁場活動に関する日仏共同研 究のため
動物	助手	加藤 邦彦	シンガポール	1.22~ 1.26	第2回アジア・オセアニア地域国 際老年学会議出席のため
物理	教授	和田 昭允	ス イ ス	1.23~ 2. 3	国際純粋応用生物物理学連合理事 会出席及び生物物理学に関する研 究打合せのため
物理	教授	上村 洗	ブ ラ ジ ル	1.28~ 2.11	半導体物理学夏の学校出席のため
物理	助教授	釜江 常好	アメリカ合衆国	1.29~ 2. 6	電子・陽電子衝突型加速器による 新粒子検出実験のため

(2 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
地質	助手	多田隆治	アメリカ合衆国	2.28～ 60.2.27	珪質堆積物の実験岩石学的研究のため
地物研	助教授	國分征	アメリカ合衆国	2.6～2.13	磁気圏プラズマ中の波動に関するAGUチャップマン会議出席のため
素粒子	助手	佐藤朝男	ドイツ連邦共和国	2.1～3.6	国際協同実験 電子・陽電子衝突実験のため
植物	教授	古谷雅樹	フランス, 連合王国, ドイツ連邦共和国	2.27～3.12	植物の光受容討論会出席及び研究連絡のため
植物園	講師	加藤雅啓	ニュージーランド	2.3～2.22	第15回太平洋学術会議出席のため
物理	教授	西島和彦	イタリア, アメリカ合衆国	2.1～6.20	素粒子論に関する研究及びシエルターアイランドII出席のため
物理	助教授	遠山潤志	アメリカ合衆国	2.3～9.15	プラズマ物理学に関する研究のため
情報	助手	坂村健	アメリカ合衆国, 連合王国	2.19～3.7	第4回オフィスオートメーション会議, 第26回IEEEコンピューターサエティ国際会議出席及び研究打合せのため
人類	教授	尾本恵市	オーストラリア	2.26～3.7	海外学術調査に関する総合調査研究のため
物理	助教授	折戸周治	ドイツ連邦共和国, スイス	2.26～3.14	e^+e^- 相互衝突装置「PETRA」及び e^+e^- 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査研究のため

理学修士の学位授与者

【昭和57年11月30日付(1名)】

天文学 鈴木 隆

理学博士の学位授与者

【昭和57年4月19日付（9名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
地球物理学	大久保 修 平	チャンドラー極運動の周波数変調仮説の検定とそのQに関する研究
論文博士	高 橋 隆	非晶質カルコゲナイド半導体の電子物性の研究
同上	三 森 文 行	核磁気共鳴による生体不均一系の研究
同上	宇 野 達二郎	セッコウ，2水塩より半水塩へのモノタキティック構造変化
天 文 学	川 上 肇	単極太陽黒点中の磁場分布
論文博士	橋 爪 道 彦	半単純リー群上のホイタッカー関数
同上	都 司 嘉 宣	歴代東海・南海地震，津波の研究
同上	浜 口 幸 久	棘皮動物初期発生の微量注射法による研究
同上	前 原 和 寿	一般型多様体の有限性

【昭和57年5月17日付（5名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	井 森 正 敏	一様構造機械の研究
同上	大 塚 洋 一	アンチモンを多量に含むゲルマニウムの電気伝導—不規則金属—
同上	小 橋 浅 哉	溶出法による放射性鉍物中のウラン，トリウム，ラジウム同位体の存在状態の研究
同上	佐 藤 博 明	四国北東部五色台及びその周辺の第三紀火山岩類の地質学的・岩石学的研究
同上	阿 部 美 紀 子	Rhizobium菌体の periplasmic spaceに含まれる物質とマメ科植物への感染機作との連関

【昭和57年6月14日付（7名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	西 郷 敏	配位子置換を伴うチトクロムCの構造変化 —その動的過程—
人 類 学	松 浦 秀 治	フッ素法によるサンギラン人類化石の編年に関する基礎的研究
植 物 学	池 内 昌 彦	カボチャ エチオプラストの内膜の生化学的研究
同上	門 田 明 雄	ホウライシダ原糸体先端成長の光制御と細胞内光受容部位
論文博士	綾 部 真 一	Glycyrrhiza echinata 培養細胞成分の化学的・生化学的研究
同上	中 田 宗 隆	気体電子線回折およびマイクロ波分光による分子構造の研究
同上	森 山 廣 思	光照射遷移金属—スズ錯体触媒の研究

【昭和57年7月12日付（6名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
物理学	住吉孝行	1 GeV/C以下に於ける反陽子・陽子及び反陽子・重水素散乱の全断面積測定による共鳴状態の探求
同上	西村弘志	加速空洞における高次共鳴効果とビームの縦方向不安定性
論文博士	稲田ルミ子	遷移金属カルコゲナイドの電子物性とインターカレーション効果
相関理化学	藤間一美	内殻励起状態の解析
物理学	柴田利明	高エネルギー原子核反応における標的領域の粒子生成
論文博士	青木晴善	遷移金属元素を含む稀薄合金の電子状態に関するド・ハースーフェンアルフェン効果による研究

【昭和57年9月27日付（3名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	網脇詳子	多形核白血球に於ける活性酸素媒介異物排除機構の解析
同上	林輝幸	錯体触媒の活性、選択性に対する配位子の構造の効果—オレフィンのカルボニル化を中心にして
同上	足原修	惑星大気の研究、とくに外惑星におけるメタン光化学

【昭和57年9月30日付（1名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
物理学	張敏守	ラマン散乱によるチタン酸バリウムの oblique phonon の研究

【昭和57年10月18日付（1名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	松野煒	鉢虫類 <i>Atorella japonica</i> の筋肉系に関する光学顕微鏡および電子顕微鏡的研究

【昭和57年11月15日付（4名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	島信幸	NbSe ₃ の電子構造
同上	高橋陽一郎	単峰折線変換のフレドホルム行列式
同上	水口仁	銅フタロシアニン薄膜における光電流の熱消滅及び光消滅に関する研究
同上	織田孝幸	ヒルベルト・モジュラー曲面の周期

【昭和57年12月13日付（2名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	永井 澄明	金属中の局在モーメントの磁気抵抗
生物化学	前川 昌平	キヒトデ精子および卵細胞に存在するActin重合の調節因子

【昭和57年2月14日付（2名）】

専門課程	学位申請者	論文題目
論文博士	坪井 俊	T^2 上の葉層 S' 束により代表されるBDiff(S')の2次元輪体についての研究
同上	溝口 優司	統計学的手法による上顎切歯シャベル形の形態分析

編集後記

今年度最後の理学部広報の原稿が、締切日を5日許り遅れて漸く全部集り、ほっとしたところで編集後記を書いています。読み応えのある広報を作ろうと努めた一年を振り返ってみましたら、原稿執筆をお願いした方は、学部長をはじめとして、何と30名近くになることに気がきました。“忙しい東大教官”（学内広報575および584号）

に余計なご負担をおかけしたことを改めてお詫び申し上げます。また事務局には終始変らぬご協力をいただきました。編集担当者交替に当り、この一年間お世話になりました大勢の皆様にご心から御礼申し上げます。

（露記）

編集：

飯高 茂（数学）	内線	4053
矢崎 紘一（物理）		4123
松野 太郎（地物）		4299
露木 孝彦（化学）		4357
尾本 恵市（人類）		4482